

## 第 四 部

### 総 合 考 察

## 総 括

竹林地 毅

(独立行政法人国立特殊教育総合研究所)

### 1. 内発的動機づけを重視した授業の必要条件

第一部で学習意欲を高める手だてと動機づけの機能、動機づけの発現形式の関係を整理した。表1に再掲する。典型的な内発的動機づけには、好奇動機と認知動機、すなわち「知りたい・わかりたい」という動機が関係深いと言われている。従って、手だてとして整理した事柄のうち、「既存の知識と矛盾する出来事に出会う」「新奇性のある題材、教材教具を用意する」の二つが、内発的動機づけを重視した授業の必要条件として考えられる。

知的障害のある児童生徒にとって「新奇性のある題材、教材教具を用意する」ことは教師の教材研究の充実により比較的容易であると考えられる。しかしながら、「既存の知識と矛盾する出来事に出会う」状況を実現することは、田口(1978)<sup>1)</sup>が整理したように、児童生徒の既存知識の実態を詳細に把握することや既存知識との矛盾点がとらえやすい事例を用意する等、教師の「矛盾する出来事に出会う」状況づくりの力量が問われる。後ほど、研究協力者の授業実践事例のなかで検討したい。

表1 学習活動への意欲を高める手だてと動機づけの機能、発現形式の関係 (再掲)

手だて	具体例	動機づけの機能	発現形式
既存の知識と矛盾する出来事に出会う	ア 教師は既存知識の実態を詳細に把握しておくこと イ 既存知識との矛盾点がはっきりととらえやすい事例を提供すること ウ 疑問を解決する手続きが簡単に見出せる事例を提供すること エ 既存知識をいつでも活用できるよう整理しておくこと オ 矛盾に気づきやすいよう図式化して視覚的に提示する カ 習慣化された行動を活用して、その行動では解決できない課題教具に出会うこと キ 課題教具の解決の難しさの程度を考慮すること	初発機能 志向機能 調整機能	好奇動機 認知動機
新奇性のある題材、教材教具を用意する	ア 校外学習などで商店街に出かける等、普段の生活にはない活動 イ 教育実習の先生が来るので歓迎会をする等、普段の生活では出会わない人との活動	初発機能 志向機能	好奇動機 認知動機
児童生徒がインシアティブをとれる授業展開をする	ア 回数を重ねるうちに、児童生徒が係分担をして進行したり、企画を考えて招待する人を選んだり、新たな会のプログラムを考えたりする	調整機能 強化機能	認知動機
学習したことを生活化して自信を持てるようにする	ア 学習したことを家庭等の場面で実際に使ってみる イ 教室(学校)とは違う場面で使い、うまくいかなかったことを自分なりに工夫して乗り越える	志向機能 調整機能 強化機能	認知動機
わかりやすい評価をする	ア パズルのように活動した結果がパズルの完成という視覚的にわかりやすい情報として伝わる教材教具を工夫する イ 与えられた数対象を数えるのではなく、人数分だけお皿を用意し配る活動により、数えた結果が正しかったかどうかを児童生徒自身が確認できるようにすること等、学習活動そのものを自己評価しやすく構成する	志向機能 調整機能 強化機能	認知動機

適切なモデルを用意する	ア 児童生徒の人間関係を生かして、他の児童生徒の活動をモデルとして示す イ 写真やイラスト等で活動を伝えることに加えてモデルを示すことで、操作や位置関係などの情報がよりはっきりと伝わることを期待される	初発機能 志向機能 調整機能 強化機能	活動性動機 操作動機 認知動機
成功感を体験するようにする	ア 生活単元学習で電話で目的地までの乗り換えをたずねるとき、過去の経験にはない内容（例えば、同じ目的地でも違うルートでの乗り換え等）をたずね、そのルートで目的地にたどり着くこと	志向機能 調整機能 強化機能	認知動機
学習過程を賞賛する	ア 砂遊びで水の入ったバケツを運ぶときに、協力して運ぼうとすることを賞賛する イ 調理で困ったときに知っていそうな人に相談することを賞賛する	志向機能 調整機能 強化機能	操作動機 認知動機
探求を促す、考えを受容するなどの発問をする	ア 問題意識を持たせる発問 「どうしてそうなるのでしょうか?」「どんな方法で調べたらよいのでしょうか?」 イ ヒントを与える発問 「〇〇のような場合がありますね。そうしたらどうなりますか?」「〇〇に注意をしながら、もう一度してごらん」 ウ 考え方を受容する発言 エ 行動を受容する発言	志向機能 調整機能	認知動機
子どもと共に活動して気づきを深める	ア 作業学習で教師も一緒に作業をすることで、事前に行った工程分析のずれや生徒の様子の子の把握のずれに気づきやすくなる	初発機能 志向機能 調整機能 強化機能	認知動機

## 2. 研究協力者の授業実践での学習意欲を高める工夫の実際

第三部の授業実践事例の学習意欲を高める工夫を整理すると表2のようになる。

表2 授業実践事例の学習意欲を高める工夫

事 例	内発的動機づけを高める工夫
生活単元学習 「クッキーづくり」	①調理活動の経験が豊富な上級生をモデルとして「探す活動」 ②児童が道案内役をして「探し出す活動」 ③作りたいクッキーを「選ぶ活動」 ④わかるレシピを「選ぶ活動」 ⑤アドバイザーとして「自分が役に立つことを実感する活動」 ⑥似たような活動を繰り返して「活動の見通しをもつ」
生活単元学習 「ご飯をつくろう」	①家庭で「準備をする活動」 ②作り方を「調べる活動」 ③作り方の「調べ方を選択する活動」 ④写真や文字などで「振り返る活動」
日常生活の指導 「歯磨きをしよう」	①養護教諭や保護者と「一緒に活動」 ②歯垢を「実感する活動」 ③児童の「活動を促す言葉かけ」

国語科「今月の詩を読もう」	①児童の「生活に関連した題材（キュウリ）の選択」 ②実物に「触れ・折り・感じ・味わう活動」 ③内容理解の手がかり（挿絵やビデオ）と「動作化や役割読みの活動」
国語科「劇づくり」	①先行経験を生かして学習活動の「計画を考える活動」 ②教師や他の児童の「モデルを見る活動」 ③ビデオを視聴して「振り返る活動」 ④お楽しみ会等で「発表して観てもらおう」
図画工作科 「カレンダーづくり」	①活動の始まりと終わりがわかる「具体物や工程表の提示」 ②児童の「動線を考慮した机の配置」 ③児童が「使いやすい道具の用意」 ④プレゼントすることで「人との関わりが生じる活動」
総合的な学習の時間 「シャボン玉大会」	①「屋上での活動」 ②これまで「経験していない活動」 ③児童一人一人が創りたいシャボン玉を「考え、工夫する活動」 ④シャボン玉を「発表する活動」 ⑤「児童の思いを感じ、実現しようとする教師の姿勢」
作業学習 「職場で生かされるパソコン技術を覚えよう」	①「製品の完成度を高くする」 ②生徒に応じた「操作の難易度の設定」（今の力でできる活動を生かす） ③企業のアドバイスを受けて「活動の現実度を高くする」

これらの学習活動への意欲を高める工夫は大きく三つに分けることができるだろう。

児童生徒主体の学習活動の展開	「モデルを見る活動」「探す活動」「探し出す活動」「選ぶ活動」「自分が役に立つことを実感する活動」「活動の見通しをもつ」「準備をする活動」「調べる活動」「調べ方を選択する活動」「振り返る活動」「一緒に活動」「実感する活動」「活動を促す言葉かけ」「触れ・折り・感じ・味わう活動」「動作化や役割読みの活動」「計画を考える活動」「発表して観てもらおう」「人との関わりが生じる活動」「考え、工夫する活動」「製品の完成度を高くする」「活動の現実度を高くする」
教師の姿勢（児童生徒のとらえ）	「児童の思いを感じ、実現しようとする教師の姿勢」
教室環境や教材・教具の工夫	「生活に関連した題材（キュウリ）の選択」「具体物や工程表の提示」「児童の動線を考慮した机の配置」や「使いやすい道具の用意」「屋上での活動」「経験していない活動」「操作の難易度の設定」

「児童生徒主体の学習活動の展開」の工夫をさらに分けると次のようになると考えられる。  
①活動の結果のフィードバック：「振り返る活動」「発表して観てもらおう」「自分が役に立つこ

とを実感する活動」

- ②先行経験や既存の知識を生かせる活動の用意：「モデルを見る活動」「探す活動」「探し出す活動」「選ぶ活動」「活動の見通しをもつ」「準備をする活動」「調べる活動」「調べ方を選択する活動」「計画を考える活動」「考え、工夫する活動」
- ③児童生徒の発言や行動の肯定的な評価：「モデルを見る活動」「探す活動」「探し出す活動」「振り返る活動」「一緒に活動」「活動を促す言葉かけ」
- ④児童生徒の人間関係を生かした活動の設定：「モデルを見る活動」「自分が役に立つことを実感する活動」「一緒に活動」「発表して観てもらおう」「人との関わりが生じる活動」
- ⑤児童生徒にとって切実な課題，楽しい活動の設定：「実感する活動」「触れ・折り・感じ・味わう活動」「動作化や役割読みの活動」「発表して観てもらおう」「製品の完成度を高くする」「活動の現実度を高くする」

「児童の思いを感じ、実現しようとする教師の姿勢」について、研究協議会での研究協力者の発言を紹介する。

- 活動を子どもが好きになるような出会い方が大切だと思った。
- 教師自身に余裕があると、子どもの活動がよく見え、展開を考えていける、子どもも教師も活動に慣れていくと柔軟に子どもの活動に合わせることができるようになる。
- 最終地点をあまり決めておかない方がよいのではないだろうか。
- 教師の意図のように答えてもらおうとして活動を止めてしまい意欲を潰してしまった。子どもが活動しているときは見守ることがいる。
- 教師は活動の最後を目的としている、子どもは活動のプロセスを楽しんでいる、というズレが生じたときに、次のプロセスについて欲しいと教師が要求すると活動がおもしろくなる。子どもの活動は教師が思っている目標に至るプロセスだと見ていることができればいい。子どもが自ら次に移ることを見守る余裕がいる。
- 教師と一緒に活動しながら成功体験を創っていくことが大切だろう。ただし、簡単に「できた」では成功体験にならないのでは？
- 子どもが何かやってみよう、試してみようとしているのを潰さないようにしていきたい。
- 教師自身の思い・願いを書き出して整理した後、子どもの思い・願いを想像して、ズレを分析するプロセスが大事ではないだろうか。
- 最初に活動を用意するとき、教師にこれなら子どもは興味を持つという自信が必要
- シャボン玉は活動の自由度（場所、活動への参加の仕方）、技術的な難易度が違った。題材の良さからも子どもの思いに気づきやすかったのでは？題材の良さ＝色々な実態の子どもたちが取り組みやすいという柔軟性がある。できあがり様々（自分で選べる）でいい、広がりがあるという魅力がある。
- 小さい子どもには自由度の高い題材がおもしろいだろうが、高等部では題材の自由度は高くなくても（＝完成品が決まっている）、目標・目的を追求する活動が必要では？
- いくつかの完成品（目的）の中から選ぶ、作り方を選ぶ等の活動の仕方を選ぶという設定で自分のやりたいことを追求する体験も大切では？
- 追求の自由度を広げるには、ある程度技術を身に付けなくてはできない。

以上のことから、授業実践事例では「児童の思いを感じ、実現しようとする教師の姿勢」により、「児童生徒主体の学習活動の展開」の具体的な手だて（①活動の結果のフィードバック②先行経験や既存の知識を生かせる活動の用意③児童生徒の発言や行動の肯定的な評価④児童生徒の人間関係を生かした活動の設定⑤児童生徒にとって切実な課題，楽しい活動の設定）が実行され、「教室環境や教材・教具の工夫」がなされているといえるだろう。

さて、前述したように、内発的動機づけを重視した授業の必要条件として整理した「既存の知識と矛盾する出来事に出会う」ことは、「児童生徒主体の学習活動の展開」の②に該当すると考えられる。すなわち、「モデルを見る活動」「探す活動」「探し出す活動」「選ぶ活動」「活動の見通しをもつ」「準備をする活動」「調べる活動」「調べ方を選択する活動」「計画を考える活動」「考え、工夫する活動」として実践されていることである。また、これらの手だては、生活単元学習として実践

されている授業実践により報告されていることに注目したい。小宮山(1967)<sup>2)</sup>が指摘したように、生活単元学習さえしておけばよいと安易に考えてはいけませんが、児童生徒の生活上の課題を解決するための一連の目的的活動を組織するという生活単元学習は、学習心理学の立場から考えても効果的な学習であるといえるだろう。従って、これらの手だてにより、実際にどのような児童生徒の学習が成立しているかを検討することが重要になる。

### 3. 授業研究のシステムの検討課題

研究協力者との協議会で、授業研究に関して次のような発言があった。

- 授業をしてみても子どもの実態がわかる。積極的に関与して考えるからわかる。観察ではわからない。しかし、複数の教師が授業にかかわるとき、児童生徒の実態のとらえ方にズレがあり、「修正しようと思う自分」と「そのままにせざるを得ない自分」がいる。
- 複数の教師が、あ・うんの呼吸になるためには？
- 授業中に気づきを交換できる、気づいて具体的な動きができる授業後の意見交換もスムーズでは？この積み重ねがあ・うんの呼吸をつくるのでは？
- 授業を「内発的動機づけがどうか」という視点をもって見直すことができた。授業をみる視点ははっきりしてきたということが良かった。
- ビデオを見直すことで、複数指導者の話し合いをするきっかけになった。
- ビデオを見直すことで、自分の動きと自分のイメージとのズレ（もっと待たなければ、もっと子どもの思いを尊重しなくては…）を感じられた。
- ビデオは繰り返し見られることいい。もう一回見てみようができる。人の授業のいいところを取り込める。
- 経験のある人、授業のうまい人の話を聞いたり見ても、その通りにはできない。その場で子どもの思い・願いをぱっと感じるというのは聞いてもできない。ビデオを何回も見直すことで学ぶことはできる。
- 授業以外の時間の意見交換も大切。例えば給食のときによく話したりする。子どものことを理解するという下地があって、授業のなかでの柔軟な対応がある。
- 授業の細かいところを文章化することは大変だけど必要。しかし、たくさん資料を準備しなくてもできる話し合いの方法はないだろうか？
- 授業のビデオを1時間分全部見直すのではなく、10分間だけ見直すのは？  
子どもの思い・願いを発見するのはうれしい、納得できる（授業全体で、発見し、納得することは難しいけど）

これらの発言から、授業研究システムの検討課題として次の2点を整理した。

- (1) 日常的、継続的にでき授業研究の方法の開発
  - ①複数教師で指導する場合、授業中の教師間の情報交換が必要であり、教師の行動の評価をする授業研究が必要。
  - ②戸惑っている子どもに着目したり、喜んでいる子どもに着目した授業研究が授業改善のヒントになる。
  - ③ある程度の期間において授業を見ていくことで、子どもの変化、教師の変化がわかりやすくなる。継続的な授業資料の収集と評価が簡単にできる方法の開発が必要。
- (2) ビデオを活用した授業研究の方法
  - ①固定（広角）カメラと教師、子どもの動きを追うカメラの設置と使い分けが必要。
  - ②評価の観点、着目する場面や活動等、授業の見方の打ち合わせが必要。
  - ③生活単元学習では、単元の展開・流れに沿って見ていける記録と授業研究が必要。

### 4. 授業研究のシステムの改善案

- (1) インシデント・プロセス法を応用した授業実践の検討

「授業の細かいところを文章化することは大変だけど必要。しかし、たくさん資料を準備しなくてもできる話し合いの方法はないだろうか？」という発言がヒントになって、インシデント・プロセス法を応用した授業実践の検討を試行した。手続きを資料1<sup>3)</sup>に示す。これは、独立行政法人国立特殊教育総合研究所の短期研修（知的障害教育コース）の班別協議の一環として実施した。協議の経過を班別協議の報告書<sup>4)</sup>より抜粋して資料2に紹介する。

インシデント・プロセス法による授業実践の検討のメリットとして、参加者が自分の情報収集や他の関係者への情報提供の偏りに気づき、修正を図られる可能性が高く、結果として、情報有機的結合が深まることが期待される。複数の教師で授業を進める場合、研究協力者の発言にもあったように、教師間の児童生徒の実態のとらえのズレ、児童生徒の思いのズレが課題として指摘される。インシデント・プロセス法を応用して授業実践を検討することで、このズレの修正が図られるだけでなく、教師間の授業中・授業後の情報交換が活発になることが期待される。

### ③ビデオ撮影による授業研究が児童生徒の主体的な活動や教師の行動に及ぼす影響

「ビデオは繰り返し見られることがいい。もう一回見てみようができる。人の授業のいいところを取り込める」「授業のビデオを1時間分全部見直すのではなく、10分間だけ見直すのは？」という発言がヒントになって、授業案の作成→授業実践（録画）→授業研究という流れではなく、ビデオ録画→授業案の作成→授業実践（録画）→授業研究という流れでビデオの視聴をし、授業研究をした。つまり、まずビデオ録画をし、視聴して気づいたことを元に指導案を作成し、授業を実施し、再度検討するという流れである。その結果、教師自身が主体的に授業改善できたという効力感を味わえることが明らかになった。また、授業をビデオで見直すことの効果として、子どもとのコミュニケーション、信頼関係づくりの重要性や子どもの活動を余裕を持って見ておれるようになった自分に気づいたことが報告された。

## 5. 今後の課題

### (1) 生活単元学習等における授業研究の充実

生活単元学習が内発的動機づけを重視した授業としての必要条件を備えやすいこと、しかしながら実際の授業で児童生徒にどのような学習が成立しているかを問う必要があることを指摘した。生活単元学習や作業学習の授業研究を継続している千葉大学教育学部附属養護学校の授業研究システムについて、佐藤ら(2002)<sup>5)</sup>は、徹底した「できる状況づくり」を視点とした指導案の事前検討、授業づくり、授業研究会議の実施であることを指摘している。「既存の知識と矛盾する出来事に出会う」＝「先行経験や既存の知識を生かせる活動の用意」により、一人一人の児童生徒にどのような学習が成立しているかを検討する必要があると考える。

### (2) 組織の問題解決方法としての授業研究システムの検討

開かれた学校づくりや盲・聾・養護学校のセンター的機能の充実が課題となっている現状は、学校が組織として機能し、組織として保護者や地域の諸機関との連携・協力を推進することを求められているといえる。連携・協力とは、チームづくりとして整理できるだろう。竹林地(2004)<sup>6)</sup>は、チームづくりには、目的・方法の共有、メンバーの貢献意欲を高めること、メンバーのコミュニケーションが不可欠であることを提言している。また、貢献意欲を高めるコミュニケーションの効率的な方法として、4つの方法について実践的に検討している。本研究においても、インシデント・プロセス法を応用した授業実践の検討について報告したが、組織の問題解決方法としての授業研究システムの検討が必要とされる。

## 文献

- 1) 田口則良(1978) ちえ遅れの子の学習意欲を高める授業の実際.北大路書房, 218-233.
- 2) 小宮山倭(1967) 精薄教育の授業研究.全日本特殊教育研究連盟編集, 2-45.
- 3) 竹林地毅(2004) 情報の共有・分析—インシデント・プロセス法による事例研究.平成15年度独立行政法人国立特殊教育総合研究所知的障害教育研究部一般研究「知的障害のある児童生徒の担任教師と関係者との協力関係推進に関する研究—個別の指導計画の作成に焦点をあてて—」研究

報告書.

- 4) 平成 13 年度短期研修知的障害教育コース「教科の指導」班研究協議報告書.
- 5) 佐藤慎二（2002）生活中心教育における授業研究の方法的特質.日本特殊教育学会第 40 回大会発表論文集, 588.
- 6) 竹林地毅（2004）総括.平成 15 年度独立行政法人国立特殊教育総合研究所知的障害教育研究部一般研究「知的障害のある児童生徒の担任教師と関係者との協力関係推進に関する研究－個別の指導計画の作成に焦点をあてて－」研究報告書.